

関係節表現

関係詞を介して名詞を修飾する節を関係節と言います。関係詞には一般に、代名詞として働く関係代名詞、名詞を修飾する関係形容詞、それに関係副詞があります。英語の**which**のように、同一形で関係代名詞と関係形容詞を兼ねるものもよく見られます。

印欧語族の言語は基本的に関係詞をもっていますが、その他にもフィン語やハンガリー語などのウラル語族、アラビア語やヘブライ語などのセム諸語、スワヒリ語などのバントゥー諸語、インドネシア語やタガログ語など関係詞を持つ言葉は多数あります。

名詞が性・数・格変化する言語では、関係代名詞と関係形容詞は基本的に変化します。ときには、フランス語のように **le quel** など性・数変化する関係代名詞と、**qui** など変化しない関係代名詞を両方もつ言葉もあります。ロシア語でも **kto** (**who**) は格変化はしますが単複兼用、**čto** (**which**) は単数のみであり、**kakoj** (**which kind of**) , **čej** (**whose**) , **kotoryj** (**which**) は性・数・格変化する。もちろん、性・数は先行詞のそれに一致し、格は関係節中での当該の格となります。英語では、疑問代名詞と同様に、**who** だけが格変化します。

先行詞を持たない、つまり先行詞を内包するものは複合関係詞と言います。英語の **what** がそうであり、フランス語の **qui** にもその用法があります。英語の **whoever** など **-ever** や **-soever** の付いたものも先行詞のない複合関係詞ですが、これは名詞節を作る他に譲歩の副詞節として働く用法もあります。ドイツ語の **was** (**what**) は、**alles** (**all**) , **etwas** (**something**) , **nichts** (**nothing**) などを先行詞とすることもできます。また前置詞を取るときは **wofür** (**for what**) など **wo-**の形に代わります。

インドネシア語の関係詞 **yang** は、しばしば先行詞が省略され、「~な人/もの」の意味を表します。
sebaiknya kita memilih yang mementingkan soal kesejahteraan rakyat (人々の福祉に関心のある人を選ぶべきです)

関係詞の用法として、先行詞を修飾してその範囲を限定する限定(制限)用法と、そうではなく単に先行詞または前文について説明するだけの非限定用法があります。たとえばフィン語やポーランド語、それにペルシア語には非限定用法があります。

Pol. **Ojciec był zmęczony po całym dniu pracy, co było zrozumiałe.** (Father was tired after a whole day of work, which was understandable)

英語やフランス語では非限定用法の場合に関係節の前にコンマを置きますが、ドイツ語やロシア語ではどの関係節にも必ずコンマを使うので、区別できません。限定用法だけしかない言語もあります。

限定用法の一種として、人称代名詞や代名詞を先行詞とする **attributive relative** という用法もあります。

関係詞は関係節中で、主語、目的語などとして働きます。英語では関係節中で目的語として働く場合に **whom** を使い、フランス語では、関係節中で主語となる場合は **qui**、目的語となる場合は **que** (母音が後にくる場合は **qu'**) を使います。

関係詞を主語や目的語としてしか使えない言語もありますし、関係詞がその他の斜格としても働くことができるものもあります。斜格をとらない言語でも、関係詞が前に前置詞を伴うことのできる場合があります。

フィン語では名詞に15の格があり、関係代名詞 **joka** (**who**) や **mikä** (**which**) も同様に格変化します。英語の

前置詞+ **which** が一語で表せるわけです。ハンガリー語も格が18種あり、aki (who) やami (which) が同様に変化します。

ロシア語は6格、ドイツ語は4格ありますが、それだけでは間に合わず前置詞+関係詞の方式も併用しています。

関係詞が前に前置詞を伴うことのできる場合、前置詞と関係詞が融合した形を持つ場合もあります。英語では硬い表現ですが **wherein** や **whereby** がそうであり、ドイツ語には **wodurch** など、フランス語では **auquel** < à+lequel など多数あります。**wherein** や **wodurch** では関係詞が関係副詞と同じ形に変形しており、これは前置詞と代名詞が融合した **therein** や **herdurch** と同じ現象です。

フランス語には融合形ではありませんが **of which** に相当する **dont** という関係詞があり、所有格として以外に、関係節中に **de (of)** を支配する動詞や形容詞がある場合にも使えます。

また英語では前置詞を関係詞の直前から関係節の末尾に移すことができます。こうできる言葉はあまりありませんが、ノルウェー語にその例があるそうです。Hvem har Per snakket med? (Who has Per talked with?)

ヒンディー語では関係代名詞 **jo** を使いますが、先行詞にそれと呼応する **vah (he/she/it)** を付ける相関表現が特徴です。**jo** は疑問詞ではなくサンスクリットの関係詞 **jad-** に由来するものですし、相関表現もサンスクリットから受け継いでいます。関係節を前に置き、代名詞でそれを受けることも可能です。関係副詞も同様に相関表現を取ります。

Jo log māms nahīm khāte haim, un ko śākāhārī kahatee haim (お肉を食べない人を菜食主義者と呼びます)

unは**vah**の斜格

maim=ne jis larkī ko gānā sikhāyā, yah ab reḍiyo par gātī hai. (私が歌を教えた女の子が今ラジオで歌っている)

Rām jis kamre mem rahtā hai, yah xūb havādār hai. (ルームが住んでいる部屋は実に風通しが良い) **jis**は**jo**の斜格

また、日本語と同様に前から修飾する連体修飾句も発達しており、相互に言い換えることができます。

yah nadī jo bahti hai = bahtī huī nadī (流れている川)

yah ādmī jo reḍiyo suntā hai = reḍiyo suntā huā ādmī (ラジオを聴いている人)

相関表現を使う点は、ベンガル語も同様です。

ekhane ye lok āse, se (lok) āmār bhai (ここにその人が来る、その人は私の弟です)

yakhan āmi bandhu-r bādi (-te) giyechilām, takhan (āmi) baita dekhechilām (友人の家に行った時、その時その本を見た)

関係形容詞は、後ろに名詞を伴うものです。所有を表す**whose** やスペイン語の **cuyo** が代表的なものです。英語では、**which** は形容詞としての使用が非限定用法に限られており、前文の内容を先行詞とすることが多いようです。また **what** や **whatever**, **whichever** もこの用法があります。関係節中でも先行詞と同じ名詞を繰り返して明確にすることもできます?。(なお、名詞に由来する形容詞を関係形容詞と呼ぶこともあります。)

Te presento una chica cuya madre cocina bien. (君にお母さんが料理のうまい女の子を紹介します)

He said he was going to finish his playing career, which idea I couldn't agree to.

The bus service may be stopped because of heavy snow, in which case I will have to walk.

He will show what ability he has.

関係副詞は該当する名詞を受けるもので、where, when の類です。英語で言うと、whereの先行詞は(the) place などの他に case、situation など、when の先行詞は time など、why の先行詞は reason など、how の先行詞は way などです。case、situation など以外の先行詞は省略可能です。whenとwhereには非限定用法もあります。

インドネシア語では、yang が関係副詞の代わりにも使われる他に、時や場所を受ける tempat (原義は“場所”) や mana (where) などの関係副詞があります。

先行詞として前文全体を受けるものもあります。英語の関係代名詞 which は非限定用法のとき、しばしば前文全体を先行詞とします。フィン語の mikä (which) もそうです。

条件に応じて関係詞を省略できることがあります。英語では関係代名詞が目的格の場合と、前置詞を伴い、その前置詞が関係詞の前ではなく文末に置かれる場合（より正確にいうと先行詞の直後に関係詞が来てその後に関係節の主語が続く場合）に省略できますが、同じ西ゲルマン語であるドイツ語では省略は不可能です。フランス語やスペイン語などのロマンス諸語でも主語が必ずしも関係詞の直後に来ない場合が多いので、省略はされないとはいいます。スウェーデン語などでは省略できるので、英語は北ゲルマン語の特徴を受け継いだものと考えられています。ただし英語でも、非限定用法の時は省略できません。ウェールズ語でもしばしば省略されます。

ベトナム語には mà や do という関係詞があります。どちらも省略することが可能です (do には関係詞以外の用法もあります)。

quyển sách mà tôi mua hôm qua (book which I bought yesterday)

anh phải xem lại báo cáo do em viết. (I have to review the report that you wrote)

Rau mà hôm qua tôi mua rất ngon. (Vegetable which yesterday I bought is very delicious)

Đây là cậu bé do hôm qua chạy trong công viên. (This is boy do yesterday ran in the park)

関係詞の起源としては、疑問詞に由来するものや、指示代名詞などに由来するものがあります。英語では who, which, what, where などが前者、that は後者だと思われまます。古英語では指示代名詞 sē (that) が関係代名詞としても単独でまたは þe を伴って用いられ、中英語の時代から which なども関係詞として使われ出したそうです。フランス語の le quel は疑問詞に定冠詞を付けた形、ドイツ語の der は定冠詞そのもので類似の変化をします。

また、インドネシア語の yang、タガログ語の na や中国語の“的”のように、連体修飾句を作る言葉が発展したと考えられるものもあります。yang の基本的な働きは限定で、orang cantik は単に“美しい人”ですが、yang を使った orang yang cantik は何人かのうちの“(特に)美しい人”と、限定する意味になります。

orang yang tua (老人) cf. orang tua (両親)、kamar yang kecil (小さな部屋) cf. kamar kecil (トイレ)

タイ語で、tīi は名詞(場所)で前置詞(in, on, at)としても使われますが、名詞と形容詞、および動詞と従属節を結ぶ働きもあるそうです。同系のラオス語の thī も、同様に名詞、前置詞の他に関係代名詞として働きます。

英語などとは違って、関係節中に先行詞を代名詞の形で残す言語もあります。これは代名詞残留型と呼ばれ、この代名詞を再述代名詞と言います。ペルシア語がその典型ですが、ケルト諸語やルーマニア語もこの型だそうです。フランス語にもそういう言い方があるそうです。Voici l'homme que Marie lui a parlé. lui (he, him)

ペルシア語の関係代名詞は ke で、英語の that と同様に名詞節(という)の形成にも使われます。限定用法の場合は先行詞である名詞の語尾に -i を付け、非限定用法の場合は付けません。関係詞が関係節中で主語以外であ

る時は（目的語の時も）再述代名詞が必要です。再述代名詞は短縮形を使うこともできます。また、この ke は（前置詞+）時 vaqt や場所 jā などの意味の名詞と結合して vaqtike (when) や jāike (where) など様々な従属接続詞を作ります。

sīb-ī rā ke rūy-e mīz būd xordam. (I ate the apple which was on the table)

īn otāq-ī-st ke mā dar ān kār mīkonim. (this is the room which we in that do work) dar は前置詞 in majalle-ī ke dar bāre-aš sohbat kardam injā-st. (the journal which about it I talked yesterday is here) dar bāre- は前置詞 about/on、-aš は ū (he/she) の短縮形

アラビア語の関係詞 al-ladhī は性・数変化しますが、定冠詞の付いた名詞のみが関係詞を取り、定冠詞の付かない名詞の場合は関係詞なしです。やはり残留型で、関係詞が関係節中で主語になる以外の場合は節中で代名詞を使います。

al-rajulu al-ladhī takallamtu ma'a-hu (the man who I spoke with him)

rajulun takallamtu ma'a-hu (a man I spoke with him)

スワヒリ語には3種の関係節表現がありますが、いずれも先行詞の（代名詞を含む）名詞クラスに対応する関係節標識を後置します。amba（アンバ関係節）：動詞句中の時制標識に關係節標識を接尾するもの（時制関係節；時制は現在、過去、未来、時間を問わない否定だけが可能）：動詞複合体の末尾に關係節標識を付加するもの（一般関係節；動詞複合体中に時制標識は付加されない）。關係節中で前置詞を伴うものは再述代名詞としての接尾辞が必要です。スワヒリ語では、先行詞が關係節標識を含む動詞複合体に直接前接しなければなりません。關係節内に別の主語がある場合はその後に来ます。

Hiki ni kitabu ambacho nilikininua jana. (これは私が昨日買った本です) cho は先行詞のkiクラスに対応

Hiki ni kusu ambacho nilikata nyama kwake. (これは私が肉を切ったナイフです) kwake はwith itの意味

Hiki ni kitabu alichokinunua mama jana. (これはお母さんが昨日買った本です)

mimi ninayesoma kitabu (本を読む私) mwitu panapolala simba (ライオンが寝ている森)

mimi nisomaye kitabu (本を読む私) mwituni palalapo simba (ライオンが寝る森に)

時制関係節を用いて時の副詞節が作られ、關係節標識は po を使います。

Nilipokwenda sokoni, nilinunua matunda (私は市場へ行ったとき、果物を買った)

日本語のように関係詞を使わない言語でも、動詞を含む連体修飾句で同様の意味を表すことができ、これも言語学では關係節と呼ばれています。このタイプの関係節を空所型と呼びます。關係詞を省略したのもこうみなされます。なお、日本語のように修飾句が前に来る言葉では“先行詞”と呼べず、被修飾語や主名詞と呼ぶべきかもしれません。朝鮮語やモンゴル語もこのタイプです。

Kr. tagja wie noh-yeo issneun chaeg Mon. shireen deer khevtej buy nom (机の上に置いてある本)

トルコ語は基本的に日本語と同じ SOV 型の膠着語ですが、ペルシア語から採り入れた ki (<ke) も使います。

adada ben-i gören kişi (The personi who saw me on the island)

adada gördüğüm kişi (The person whom I saw on the island)

Ali, ki bugün Ankaradan geldi, çok yorgun. (Ali, who came from Ankara today, is so tired)

= Bugün Ankaradan gelen Ali çok yorgun.

Ben kapıyı kırarak açmaya çalıştım, ki bunu imkansız buldum. (I tried to break the door open, which I found

impossible)

英語で関係節を現在分詞や過去分詞で書き換えたものを縮約関係節 (reduced relative clause) と呼んでいます。これも連体修飾句なので空所型です。

ウラル諸語のフィン語やハンガリー語も膠着語であり、関係詞の他に、名詞の前に連体句を置くこの形式が可能です。Fin. pöydällä oleva kirja Hun. az asztalon lévő könyv (机の上に置いてある本)

タミル語にも関係詞はなく、連体句を使います。連体形を関係分詞 (連体分詞) と呼んでおり、現在語幹+a で作る現在形、過去語幹+a からできる過去形、不定詞語幹+um からなる未来形があります。否定形は不定詞語幹+ātaで作り、時制の区別はありません。これらに時を表す言葉を付けて、時の従属節を作ることができます。

ヒンディー語の空所型、連体修飾句には、分詞+huwā、不定詞-kā、不定詞-vālā の三種あります。

mere dost=kī likhī huī pustak (私の友人が書いた本)

merī landan=kī kharīdī huī kitāben (私がロンドンで買った本)

machliyān yalne=kī gandh (魚を揚げる匂い) bhārat=se xarīdnevālī cizon (インドから購入するもの)

中国語の“的”は連体句を作る言葉で、これを関係詞と呼ぶかは感覚的にも微妙なところがあります。

ドイツ語に冠飾句という連体修飾構文があり、冠詞の後に前置詞が続く点がその特徴です。この句は被修飾語の前に置かれます。どちらももっと複雑な入子型の表現もありますが、実は読み方がそっくりなのです、眼を右に動かしたり、左に動かしたり、また右にと。

das auf dem Tisch liegende Buch 躺在卓子上的書 (デスク上に置いてある本)

ein aus der Zeitung geschnittenes Foto 從報紙上剪下來的照片 (新聞から切り抜いた写真)

Die für den Aufbau komplexer molekularer Gerüste sehr interessanten Materialien

構建複雜分子框架的重要材料 (複雑な分子骨格の構築にとって非常に興味深い材料)

Die indogermanische Ursprache ist die nicht belegte, aber durch sprachwissenschaftliche Methoden erschlossene gemeinsame Vorläuferin der indogermanischen Sprachen.

印欧語系的原始語言是，雖然沒有文獻記載，但已通過語言學方法重建而來的印欧語系的共同祖先。

(印欧祖語は、文証はないが、言語学的手法によって再建された、印欧語の共通の祖先である)

die von mir für ihn an die in dem von ihm zur Bearbeitung übernommen Steinbruch beschäftigt gewesenen Arbeiter vorgeschossenen Arbeitslöhne.

我替他墊付給在他接手处理的採石場雇用的工人的工資

(私が彼に代わって、彼が運営を引き受けた採石場で働いていた労働者に前払いした賃金)

なお、中国語では、的を使わず、被修飾語の後に関係節を置く、主名詞先導型の表現も可能だそうです。

一个会說中国話的外国人

一个外国人会說中国話 (中国語を話せる外国人)

バスク語も、語順といい、最後に接辞を付けて関係節ができる点といい、つい中国語の的を思い出してしまいます。

sten dugu guzti(a) (我々はすべてをみる)、動詞の末尾に-nを付けると、ikusten dugun guztia (我々が見るところのすべて) と関係節になります。

Jaungoikoakt ikusten dugun guztia egins du (神は我々が見るところのすべてを作った)

dugun を単数内格にした形は when の意味で使えます。 ikusi dugunean (我々が彼に会ったとき)

マダガスカルのマラガシ語やニュージーランドのマオリ語では主語のみが関係節になることができます。また、東アフリカの大湖地方のルアンダ語やガンダ語では主語と直接目的語のみが関係節化可能だそうです。一方、スロベニア語では属格も含めて全ての位置が関係節化可能です。このように格によって関係節の作りやすさが変わります。

この関係節の作りやすさは「接近可能性の階層」accessibility hierarchy (AH)と呼ばれ、主語>直接目的語>間接目的語>斜格>属格>比較対象の順になるとされています。主格・目的格以外の斜格については、日本語では 位置に>位置を>目標に/へ>位置で>手段で>奪から>所有の>起点から>随伴と>理由で の順になるとのことです。

関係節を作る方法が複数ある言語では、空所型・関係詞省略型>関係代名詞残留型（前置詞+関係詞）>代名詞残留型>非縮約型（名詞残留型）の順に適用していくことになります。

英語などでは直接目的語までが関係詞省略可能であり、その他は前置詞+関係詞の形を使うというわけです。whose が省略できず、また of which の of が文末に回せないのも、属格のAH順位が低いからです。

ジャワ語では主語は空所型で、属格は代名詞残留型、マレー語では主語は空所型で、属格と一部の非直接目的語は代名詞残留型になり、その他の格は態を変換しないと関係節化できません。南島諸語では広い意味での態を変換することが可能です。ただし、マラガシ語やマオリ語では属格は態変換も困難で、関係節にすることができないそうです。

関係詞を使わないタイプの言語でも同様で、中国語では空所型は直接目的語までで、間接目的語以降は代名詞残留型を使い、日本語では斜格以降が代名詞残留型になります。たとえば、「僕が記事を書いたレストラン」は、“そこで書いた”のか“それについて書いた”のかどちらにも取れます。はっきりさせるには“そこで”か“それについて”を補ってやる必要があります。すなわち関係節中に被修飾語の代わりに代名詞+格助詞を加えるので、代名詞残留型というわけです。